

博 慈 会

老研一口伝言

熊の出没は社会の未病？

クマ、くま、熊。今年ほどこのクマが“山からあふれ市街地へ出沒”、とメディアにほぼ毎日報道された年はありません。そしてコンビニ前で、まるで常連客のように座り込むクマまで現れるしまつ。被害に遭われた約200名の方々には心よりお悔やみ申し上げます。

本来ならクマは、秋にドングリを食べて丸くなり、冬には静かに穴にこもる動物です。ところが近年、山の本の実気候変動の影響で不作続き。仕方なく人里をのぞきに來れば、そこには生ごみ、果樹園、家庭菜園。“クマ様バイキング”が豊富に並んでいるのだから、彼らも「冬眠より街のほうが暮らしやすいのでは」と考えたとしても不思議ではないでしょう。

● 自然界と人間社会の不調和のサイン

一方、人間側の里山はというと、過疎化や高齢化で手入れが行き届かず、藪が茂り放題。住民が山から離れれば、山のほうから近づいてくるのは自然の法則。もはや「クマが人里に迷い込む」のではなく、「人里がクマの生活圏に迷い込んだ」と言ったほうがしっくりする地域もあります。これは自然界と人間社会の不調和が始まった「未病のサイン」と受け取ってもいいのではないのでしょうか。

● 生活習慣病となるクマの登場

さらに厄介なのは、クマの学習能力です。一度、人間の残した食べ物の味を覚えたクマは、まるで“深夜のラーメン”の味を忘れられない人間のように、生活習慣病になってしまうのではないかと心配までしてしまいます。

● 自然界からの未病アラート

それはさておき、気候の温暖化、山の栄養、地域の管理、廃棄物の扱い——あらゆる“小さな乱れ”が積み重なり、クマが街をうろつくという“大きな症状”になって表れていると考えられます。このようなクマの出没は、自然界からの“未病アラート”と受け取って見たいと思います。「未病とは兆しであり、兆しを読むこと」という哲学を、クマが身をもって教えてくれていると言っても過言ではありません。つまり今年のクマの出没劇は、**社会の未病化**と捉えてみましょう。即ち食環境が乱れ、住環境が乱れ、地域の境界が乱れた結果、クマが“生活圏の迷子”になってしまったとも言えるのです。クマが山を下りてきた理由を考えることこそ、いま私たちが取り組むべき“社会の未病ケア”ではないのでしょうか。

(博慈会 老人病研究所 所長 福生吉裕)

